

肩車の未来宇宙

酔狂

月のない夜、東の空にオリオンが昇りはじめた。

人類は長い時間を掛けて天文学を発展させ、空に浮かぶ星を見て方角を知る術を得たというのに、彼女は星を見て違うものを見出している。日が沈んで彼女の時間になれば、懐中時計の盤面をを星明かりに照らしている間にも『二十一時十四分、三十秒ね』なんて言葉が出てくるだろう。そんなことを言う相手、宇佐見蓮子の住むアパートへとメリーは歩を進める。大学キャンパスの北口を出て、出町柳駅から川沿いに少し行けば、道路沿いに見えてくるのは歴史を感じるアパート群。その一角に、蓮子の住む部屋がある。

今日はこれから、明日の休日をいかに満喫するかを話し合うべく、用事が終わりに次第に向かわせてもらう、予定だった。しかし、寒空の元を急いで向かった目的地を前にして、メリーは足を止めた。

アパート二階の角部屋に位置する彼女の部屋は、カーテンがなければ部屋の中を窺うことができる。何かと危険だから遮光性のカーテンに変えた方が良くという説得の言葉

は、今のところ徒労に終わっている。そんな眼前の部屋から漏れる光はなく、家主の不在を示していた。

「もう、帰ってるって言ったじゃない」

途方に暮れている間にも、晩秋の夜風は容赦なく身にしみる。合い鍵でも有れば勝手に入ることもできるのだが、生憎それも叶わない。普段はもっぱら私の家に入り浸っているので、こうして蓮子の部屋を訪れる機会は相当のレアケースだ。

「蓮子はうちの鍵持ってるんだから、不公平よね」

今度忘れないうちに私も鍵をもらっておこう、と独りごち、私はコートのポケットから携帯端末を取り出した。左手の手袋を外し、ひんやりとする端末の画面手に取った。そして、どこにいるのか電話を掛けようと画面を操作しているとき、後方に誰かの気配を感じ振り返った。

「あ、バレちゃった」

案の定、そこに居たのは紛れもなく蓮子だった。右手には白いビニル袋を持ち、ろくに着込んでいない出で立ちから、そう遠くへ行っていたわけではないと推測できた。

「何やってるのよ」

「いや、驚かそうと思って」

「そうじゃなくて……とにかく寒いから中で話しましょう？」
それもそうね、と言って先に進む蓮子に続いて外階段を